

ルカの福音書 81回
富の弊害
—金持ちも神の国に入れるか—
18：18～30

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ 18：9～19：27 は、「エルサレムへの旅」の結論部分である。
- ③ルカ 18：8

Luk 18:8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

- ④ルカは、「地上に信仰が見られるでしょうか」というテーマを展開する。
 - *救いは、恵みと信仰による。
 - *ルカの強調点は、救われるのはどういう人かという点にある。

(2) ルカ 18：9～19：27 の内容

- ①パリサイ人と取税人のたとえ話（18：9～14）
- ②謙遜に関する教え（18：15～17）
- ③富の弊害（18：18～30）
- ④受難の予告（18：31～34）
- ⑤盲人の癒やし（18：35～43）
- ⑥ザアカイの救い（19：1～10）
- ⑦ミナのたとえ話（19：11～27）

2. アウトライン

- (1) 富める青年との対話（18～23 節）
- (2) 富に関する教え（24～30 節）

3. 結論

- (1) 唯一の救いの方法
- (2) クリスマンと富の関係

富の弊害について学ぶ。

I. 富める青年との対話（18～23 節）

1. 18節

Luk 18:18 また、ある指導者がイエスに質問した。「良い先生。何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」

- (1) マタ 19 : 20 によれば、この指導者は青年である。
 - ①「ネアニスコス」は、20~40 歳くらいの男性である。
 - ②マタ 19 : 22 によれば、彼は資産家である。
 - ③彼は、指導者である（サンヘドリンの議員か、会堂管理者）。
 - ④前回登場した幼子たちとこの青年は、好対照をなしている。

- (2) 当時のユダヤ教によれば、彼はすでに神の恵みを得ている。裕福であるから。
 - ①しかし彼は、永遠のいのちを受け継ぐという確信を得たいと願っている。
 - *永遠のいのちを受け継ぐとは、神の国に入ることである。
 - ②彼は、永遠のいのちは行いによって得られると考えている。

- (3) 彼は、「良い先生」と呼びかけている。
 - ①「アガソス」ということばを使用している（本質的に善）。
 - ②「良い」とは、ラビに呼びかける際に使用することばではない。
 - ③彼は、イエスをラビ以上の霊的指導者として尊敬している。
 - *イエスを神と見ているかどうかは、会話の内容で明らかになる。

2. 19節

Luk 18:19 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『良い』と言うのですか。良い方は神おひとりのほか、だれもいません。」

- (1) イエスのことばは、正しい神学を提示している。
 - ①人は墮落しており、神だけが良い方である。
 - ②ユダヤ人たちは、このことを強調した。「the Good」は神のことである。

- (2) イエスは、自らの神性を否定しているのではない。
 - ①ここでイエスは、この青年の信仰を試しているのである。
 - ②イエスは、「あなたこそ良い方、神です」という告白を期待された。
 - ③そうすれば、「あなたは永遠のいのちを得ている」と宣告されたはずである。

- (3) この青年は、イエスを神とは信じていなかった。
 - ①彼の応答（23節）から、そのことが明らかになる。

3. 20～21節

Luk 18:20 戒めはあなたも知っているはずです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。あなたの父と母を敬え。』

Luk 18:21 するとその人は言った。「私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」

- (1) 青年が答えないので、イエスは彼の質問に戻られた。
 - ①ラビたちは、律法の全体を守ることは可能であると教えていた。

- (2) イエスは、十戒の第5戒～第9戒を引用された。
 - ①姦淫してはならない（第7戒）。
 - ②殺してはならない（第6戒）。
 - ③盗んではならない（第8戒）。
 - ④偽りの証言をしてはならない（第9戒）。
 - ⑤あなたの父と母を敬え（第5戒）。

- (3) イエスは、業による救いは不可能であることを示そうとされた。
 - ①第1戒～第4戒（神に対する責務）は引用しなかった。
 - ②第10戒（むさぼりの罪）も引用しなかった。
 - ③律法の役割は、人に罪の認識を与えることである。
 - ④この青年は、律法の本来の目的を理解しなかった。

4. 22節

Luk 18:22 イエスはこれを聞いて、彼に言われた。「まだ一つ、あなたに欠けていることがあります。あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」

- (1) 次にイエスは、さらなるテストを課された。
 - ①第10戒（むさぼりの罪）を指摘された。
 - ②富が、彼の心を支配していた。
 - ③富を第1とするのは、第1戒の違反である（神を第1としない罪）。

- (2) もし彼が、富の束縛から離れるなら、永遠のいのちを得ることになる。
 - ①「天に宝を持つ」とは、永遠のいのちを持つことである。
 - ②イエスに従うとは、自己義認の態度を捨てて、イエスに信頼することである。

5. 23節

Luk 18:23 彼はこれを聞いて、非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。

- (1) 青年は、非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。
 - ①彼は、隣人を自分自身のように愛していなかった。
 - ②また、神第1の生活をしていなかった。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」(出20:3)
- (2) 彼は救われていなかった。
 - ①この青年がその後どうなったかは、記されていない。

II. 富に関する教え (24～30節)

1. 24～25節

Luk 18:24 イエスは彼が非常に悲しんだのを見て、こう言われた。「富を持つ者が神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう。」

Luk 18:25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」

- (1) 弟子たちへの教え
 - ①金持ちが神の国に入るのは、非常に難しい。
 - ②「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しい」
 - *これは、誇張法による格言である。
 - *針の穴とは、そういう名称の門ではない。
 - *「針の穴」という門は、中世になってから出現したものである。
 - *「針の穴」とは、縫い針の穴である。ルカでは、手術用の針の穴である。

2. 26～27節

Luk 18:26 それを聞いた人々は言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」

Luk 18:27 イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」

- (1) 弟子たちもパリサイ派の神学の影響を受けていた (マタイ 19:25)。
 - ①ルカは、「人々」という主語を使っている。
 - *この教えには、普遍的な適用があることを示している。
 - ②パリサイ派の神学では、金持ちは神の祝福を受けているとの教えがあった。
 - ③金持ちでも救われないとしたら、誰が救われるというのか。
- (2) 人間には不可能なことを、神はなさる。
 - ①金持ちが救われるのは、難しい。
 - *見える物に信頼しているので、見えない神を信頼することができない。

*貧しい人たちに対する優越感を持っている。

②神だけが、金持ちの救いを可能にしてください。

③金持ちにも、貧しい人にも、救いの可能性は備えられている。

*神は、人の心に罪の意識と悔い改めを与えてください。

3. 28節

Luk 18:28 **すると、ペテロが言った。「ご覧ください。私たちは自分のものを捨てて、あなたに従って来ました。」**

(1) ペテロのことばの意味

①自分たちは、この青年ができなかったことをしました。

②それゆえ、永遠のいのちを得ているとの保証を与えてください。

(2) イエスは、ペテロの問いかけに答えた。

①神の国のために犠牲を払った者は、祝福を受けるという約束を与えた。

4. 29～30節

Luk 18:29 **イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。だれでも、神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者は、**

Luk 18:30 **必ずこの世で、その何倍も受け、来たるべき世で、永遠のいのちを受けます。」**

(1) イエスは、3種類の報賞を約束された。

①12弟子が受ける報賞

②信者一般が受ける報賞

③永遠の報賞

(2) 12弟子が受ける報賞

①「来たるべき世で」とは、神の国（千年王国）のことである。

②信者が受ける報賞は、千年王国での地位や責務に関係している。

*キリストの御座の裁きで報賞は決まる。それが可視化されるのは千年王国。

③12弟子は、12の座に着いて、イスラエルの12部族をさばく。

(3) 信者一般が受ける報賞

①イエスのために家族や畑を捨てた者は、今の時代において、その幾倍も受ける。

②信者は、世界に広がる神の家族との交流を持つようになる。

③富を犠牲にした者は、その幾倍もの霊的富を得るようになる。

(4) 永遠の報賞

- ①永遠のいのちのことである。
- ②すべてを捨てることによって永遠のいのちを得るのではない。
- ③永遠のいのちは、賜物である。
- ④神を第1にする者は、永遠のいのちをフルに味わい、楽しむようになる。
*クリスチャン生活をフルに楽しむ人は幸いである。

結論

1. 唯一の救いの方法

- (1) 持っている物をすべて売れば、救われるというのではない。
- (2) 救いの道は、たった1つである。主イエスに対する信仰がそれである。
 - ①自分は罪人で、神の律法を行うことができないとの認識が必要である。
- (3) この青年は、持ち物を売って隣人愛を実践することができなかった。
- (4) この青年は、こう告白すべきであった。
「もしすれば救いの条件なら、私にはできません。自分の努力によって自分を救うことはできません。それゆえ、あなたの恵みによって私を救ってください」

2. クリスチャンと富の関係

- (1) この箇所は、信者は金持ちになってはいけないと教えているのではない。
 - ①神は私たちに物質的祝福も与えてくださる。
 - ②クリスチャンは、富の管理者としても召されている。
 - ③将来に備えて、賢く富を管理する責任がある。
- (2) 信者は、富の管理者としての使命を再認識すべきである。
 - ①富に縛られる人は、良き管理者ではない。
 - ②今の世界には、助けを必要とする人たちが満ちている。
 - ③今は、主の再臨が近い時代である。
 - ④主は、地上に宝を積むよりも、天に宝を積むように教えておられる。
 - ⑤マタ6:19~21

Mat 6:19 自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。

Mat 6:20 自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。

Mat 6:21 あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあります。

ルカの福音書 82回
3度目の受難の予告
—イエスの十字架は失敗だったか—
18：31～34

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ 18：9～19：27 は、「エルサレムへの旅」の結論部分である。
- ③ルカ 18：8

Luk 18:8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

- ④結論部分での強調点：救われるのはどういう人か。

(2) ルカ 18：9～19：27 の内容

- ①パリサイ人と取税人のたとえ話（18：9～14）
- ②謙遜に関する教え（18：15～17）
- ③富の弊害（18：18～30）
- ④受難の予告（18：31～34）
- ⑤盲人の癒やし（18：35～43）
- ⑥ザアカイの救い（19：1～10）
- ⑦ミナのたとえ話（19：11～27）

(3) ルカは、受難の予告を3回記している。

- ①ルカ 9：22（ペテロの信仰告白の直後）
- ②ルカ 9：43～45（少年から悪霊を追い出した直後）
- ③ルカ 18：31～34（エルサレムに近づいたとき）

*先に行くほど、詳細な予告になっていく。

2. アウトライン

- (1) 受難の予告（31～33節）
- (2) 弟子たちの無理解（34節）

3. 結論

- (1) 聖書的メシア像

- (2) 弟子たちがメシアの受難を理解できなかった理由
- (3) メシアの受難を理解できないことの悲劇

3度目の受難の予告について学ぶ。

I. 受難の予告 (31~33 節)

1. 31 節

Luk 18:31 さて、イエスは十二人をそばに呼んで、彼らに話された。「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。人の子について、預言者たちを通して書き記されているすべてのことが実現するのです。

- (1) イエスは、12人をそばに呼んで、3度目の受難の予告を語られた。
 - ①「そばに呼んで」とは、これから語られることが重要であることを示している。

(2) 話の内容

- ①イエスと弟子たちは、エルサレムに上って行く。
 - *危険が待ち受けていることを知りながら、自発的に上って行く。
- ②預言者たちを通して書き記されているメシア預言は、すべて成就する。
- ③ルカだけが、エルサレムで起こることは旧約聖書の成就であると書いている。
- ④ルカ 22 : 37

Luk 22:37 あなたがたに言いますが、『彼は不法な者たちとともに数えられた』と書かれていること、それがわたしに必ず実現します。わたしに関わることは実現するのです。」

- ⑤使 13 : 29 (パウロのメッセージ)

Act 13:29 こうして、彼らはイエスについて書かれていることをすべて成し終えた後、イエスを木から降ろして、墓に納めました。

- (3) ルカは、読者により深い確信を与えようとしている。
 - ①メシア預言の成就是、イエスがメシアであることの証拠となる。
 - ②次の32~33節の内容は、預言者たちの預言の総括である。

2. 32~33 節

Luk 18:32 人の子は異邦人に引き渡され、彼らに嘲られ、辱められ、唾をかけられます。

Luk 18:33 彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

- (1) 「人の子は異邦人に引き渡され、……」
 - ①イエスは、ご自身の受難に異邦人も関わることを予告された。
 - ②この情報を記している目的は、異邦人に自らの責任を自覚させるためである。

(2) 受難の予告の成就

①「わたしたちはエルサレムに上って行きます」

*ルカ 18：35～19：45

②「人の子は異邦人に引き渡され、」

*ルカ 19：47～23：1

③「彼らに嘲られ、辱められ、唾をかけられます」

*ルカ 23：1～32

④「彼らは人の子を……殺します」

*ルカ 23：33～56

⑤「人の子は三日目によみがえります」

*ルカ 24：1～12

II. 弟子たちの無理解 (34 節)

1. 34 節

Luk 18:34 弟子たちには、これらのことが何一つ分からなかった。彼らにはこのことばが隠されていて、話されたことが理解できなかった。

(1) 不思議なことが起こった。

①弟子たちには、これらのことが何一つ分からなかった。

②彼らにはこのことばが隠されていて、話されたことが理解できなかった。

③ルカは同じ文の中で、2回も弟子たちの無知に言及している。

(2) なぜ理解できなかったのか。

①弟子たちに思い込みがあった。

②彼らは、紀元1世紀のユダヤ教のメシア像の影響を受けていた。

*メシアは栄光の王として来られる。

*メシアは、ただちにローマの圧政からイスラエルを解放する。

③それ以外の計画を啓示されても、受け入れることができなかった。

④私たちにも、同じことが起こる。

(3) 弟子たちはいつ理解できるようになったのか。

①復活のキリストに出会ってから、受難の意味を理解するようになった。

②それまでは、イエスは弟子たちから理解されない孤独を味わった。

結論

1. 聖書的メシア像

(1) 初臨のメシア

①受難のしもべ

②私たちの罪のために死に、墓に葬られ、3日目によみがえられた。

(2) 再臨のメシア

①栄光の王

②地上に神の国を建設される。

2. 弟子たちがメシアの受難を理解できなかった理由

(1) 12弟子は、メシアの使命を誤解していた。

①メシアは王であり、すぐに神の国が設立されると思い込んでいた。

(2) 今でも、イエスの十字架上の死は失敗であったと考える人がいる。

3. メシアの受難を理解できないことの悲劇

(1) 聖書に啓示された神の計画の全貌を理解することができない。

(2) 神が人間の敵意を用いて御業を行われることがあることを理解できない。

(3) 迫害や拒否が弟子としての生活の一部であることを理解できない。

(4) 主のしもべとして謙遜に歩む者が、高く上げられるということを理解できない。

ルカの福音書 83回

目の見えない人の癒やし 一好機を逃すな

18 : 35～43

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

②ルカ 18 : 9～19 : 27 は、「エルサレムへの旅」の結論部分である。

③ルカ 18 : 8

Luk 18:8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

④結論部分での強調点：救われるのはどういう人か。

(2) ルカ 18 : 9～19 : 27 の内容

①パリサイ人と取税人のたとえ話（18 : 9～14）

②謙遜に関する教え（18 : 15～17）

③富の弊害（18 : 18～30）

④3度目の受難の予告（18 : 31～34）

⑤目の見えない人の癒やし（18 : 35～43）

⑥ザアカイの救い（19 : 1～10）

⑦ミナのたとえ話（19 : 11～27）

(3) ルカの意図

①取税人と目の見えない人は、ともに社会からのけ者にされていた人物である。

②イエスは、謙遜に助けを求める目の見えない人を救われた。

③救われるのはどういう人かというテーマが続いている。

2. アウトライン

(1) 状況説明（35節）

(2) 目の見えない人の懇願（36～39節）

(3) イエスの応答（40～43節）

3. 結論

(1) 目の見えない人と宗教的指導者の対比

(2) 好機を逃すな

目の見えない人の癒やしについて学ぶ。

I. 状況説明 (35 節)

1. 35 節

Luk 18:35 イエスがエリコに近づいたとき、一人の目の見えない人が道端に座り、物乞いをしていた。

(1) 目の見えない人の癒やしは、何度起こったのか。

①3度起こったという説

*マタ 20 章 (2 人)、マコ 10 章 (バルテマイ)、ルカ 18 章 (1 人)。

②2度起こったという説

*エリコに近づいたとき (ルカ 18 章)

*エリコを出て行ったとき (マタ 20 章、マコ 10 章)

③1度だけ起こったという説

*エリコに近づいたとき、イエスは目の見えない人に出会った。

*エリコを去るとき、イエスは目の見えない人を癒やした。

④最も可能性が高い説

*旧約のエリコを出て、新約のエリコに入るときに、癒やしが行われた。

(2) イエスの一行は、エリコまで来た。

①エリコはユダヤの一部である。

②エリコからエルサレムまでは、徒歩で1日の道のりである。

(3) 1人の目の見えない人が道端に座って、物乞いをしていた。

① (新改訳 2017) は、「目の見えない人」と訳している。

②彼は、人通りの多い場所に座っていた。

③エリコは裕福で、巡礼者が多く通る町である。

(4) 当時の目の見えない人の社会的地位

①視覚障害者や身体にハンディのある人は、一般職に就くことができなかった。

②生き延びる唯一の方法は、物乞いをするのであった。

③彼らは、社会的弱者であったが、モーセの律法によって守られていた。

*宗教的には、見下されていた。

*子どもたちが見下されていたのと、同じである。

II. 目の見えない人の懇願 (36~39 節)

1. 36～37 節

Luk 18:36 彼は群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事かと尋ねた。

Luk 18:37 ナザレ人イエスがお通りになるのだと人々が知らせると、

- (1) この記録は、ルカだけが書いている。
 - ①彼は群衆が騒いでいるのを耳にして、何が起きているか知りたいと思った。
 - ②人々は、ナザレ人イエスがお通りになるのだと答えた。
 - ③人々の興奮が伝わってくる描写である。

2. 38～39 節

Luk 18:38 彼は大声で、「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」と言った。

Luk 18:39 先に行く人たちが、黙らせようとしてたしなめたが、その人はますます激しく「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と叫んだ。

- (1) 彼は、イエスに関する知識を持っていた。
 - ①ナザレのイエスは、目の見えない人の目を開いた方である。
 - ②そこで彼は、叫び始めた。

- (2) 「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」
 - ①彼は、イエスがイスラエルのメシアであることを信じた。
 - * 「ダビデの子」とは、メシアのタイトルである。
 - * 2サム7:8～16、1歴17:7～14
 - * 不信仰な指導者たちとは、対照的である。
 - ②彼は、信仰によって、神のあわれみを求めた。
 - * 自分の義を主張しないで恵みだけを求めたのは、あの取税人と同じである。

- (3) 行列の先頭に行く人たちは、彼を叱って黙らせようとした。
 - ①彼らは、目の見えない人を見下している。
 - ②子どもがイエスに近づくのを阻止したのと同じ動機がある。
 - ③彼はますます激しく「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と叫んだ。
 - * 彼は、イエスには癒やしを行う力があることを知っていた。
 - * そして、イエスがそうしてくださることを願った。
 - ④人々が彼を黙らせようとすればするほど、激しく叫んだ。

- (4) イエスご自身は、彼を黙らせなかった。
 - ①イエスは、「人の子」という称号を好んで用いられた。
 - ②ここでは、「ダビデの子」と呼ばれることを受け入れている。

Ⅲ. イエスの応答（40～43節）

1. 40～41節

Luk 18:40 イエスは立ち止まって、彼を連れて来るように命じられた。彼が近くに来ると、イエスはお尋ねになった。

Luk 18:41 「わたしに何をしてほしいのですか。」するとその人は答えた。「主よ、目が見えるようにしてください。」

(1) イエスは立ち止まられた。

- ①エルサレムに向かう決意を固めているときでも、弱者への奉仕を忘れない。
- ②「彼を連れて来るように命じられた」とは、たしなめた人たちへの叱責である。
- ③目の見えない人は、すぐにイエスのところに来た。

(2) 「わたしに何をしてほしいのですか」

- ①イエスは、この目の見えない人が何を欲しているか知っていた。
- ②これは、目の見えない人の信仰を確認し、それを引き出すための質問である。

(3) 「主よ、目が見えるようにしてください」

- ①「主よ」は、尊敬のことば以上のものである。
- ②彼は、イエスがメシアで、癒やしの力を持っていることを確信していた。

2. 42～43節

Luk 18:42 イエスは彼に言われた。「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救いました。」

Luk 18:43 その人はただちに見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。これを見て、民はみな神を賛美した。

(1) 「見えるようになれ」

- ①イエスは、ことばによって目の見えない人を癒やされた。

(2) 「あなたの信仰があなたを救いました」

- ①信仰が彼を救ったのではない。
- ②イエスを信じたので、イエスの力が彼の上に働いたのである。
- ③彼は、謙遜にあわれみを求めたので、救われた。

*彼は、肉体的にも霊的にも、目が開かれた。

(3) 癒やしに対する応答を詳細に記しているのは、ルカだけである。

- ①見えるようになった人は、神をあがめながらイエスについて行った。
- ②これを見て、民はみな神を賛美した。

結論

1. 目の見えない人と宗教的指導者の対比

(1) 目の見えない人の運命

- ①自らの罪と無力を認識していた。
- ②イエスはメシアであるという信仰があった。
- ③イエスのあわれみだけを求めた。
- ④しつこく、何度も、大声で求めた。
- ⑤イエスに対する信仰を告白したので、イエスの力が働いた。
- ⑥肉体の目が見えるようになったのは、霊的救いのしるしであった。
- ⑦神をあがめながら、イエスについて行った。
- ⑧それから1週間後に、イエスの十字架上での死を目撃することになる。

(2) 宗教的指導者たちの運命

- ①自らの義を誇り、他者を見下していた。
- ②イエスをメシアとは信じなかった。
- ③自己義認の精神で神の前に出ていた。
- ④しつこく、何度も、イエスに挑戦した。
- ⑤イエスのメシア性を拒否したので、イエスから呪いのことばを受けた。
- ⑥肉体の目は見えていたが、霊的には盲目であった。
- ⑦イエスを十字架につけよと叫んだ。
- ⑧それから40年後に、エルサレムは滅びることになる。

2. 好機を逃すな

- (1) いつかまた考えようと、先延ばしにしてはならない。
- (2) イエスがエリコを通るのは、これが最後である。
- (3) 目の見えない人は、最初で最後の機会を有効に捉えた。
- (4) 2コリ6:1~2

2Co 6:1 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みは無駄に受けないようにしてください。

2Co 6:2 神は言われます。／「恵みの時に、わたしはあなたに答え、／救いの日に、あなたを助ける。」／見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。

ルカの福音書 84回

ザアカイの救い 一子どもでも分かる大人の話ー

19：1～10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

②ルカ 18：9～19：27 は、「エルサレムへの旅」の結論部分である。

③ルカ 18：8

Luk 18:8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

④結論部分での強調点：救われるのはどういう人か。

(2) ルカ 18：9～19：27 の内容

①パリサイ人と取税人のたとえ話（18：9～14）

②謙遜に関する教え（18：15～17）

③富の弊害（18：18～30）

④3度目の受難の予告（18：31～34）

⑤目の見えない人の癒やし（18：35～43）

⑥ザアカイの救い（19：1～10）

⑦ミナのたとえ話（19：11～27）

(3) この聖書箇所の特徴

①「エルサレムへの旅」のクライマックスである。

②イエスは、助けを必要としている人に救いを提供する。

③その人は、救いを受け取り、悔い改めの実を結ぶ。

④ルカ 19：10 は、この福音書の中心聖句である。

Luk 19:10 人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」

2. アウトライン

(1) 起ー取税人ザアカイ（1～2節）

(2) 承ー木に登るザアカイ（3～4節）

(3) 転ーザアカイを見上げるイエス（5節）

(4) 結ーイエスを家に迎えるザアカイ（6～10節）

3. 結論：ザアカイは、救われる人の特徴を体現している。

ザアカイの救いについて学ぶ。

I. 起—取税人ザアカイ（1～2節）

1. 1節

Luk 19:1 それからイエスはエリコに入り、町の中を歩いておられた。

- (1) 当時、2つのエリコがあった。
 - ①旧約のエリコとその南側の新約のエリコ
 - ②ヘロデ大王は、新しいエリコを建設し、冬の宮殿を建てた。
 - ③そこは当時のリゾート地で、冬季には多くの訪問者が来訪した。
- (2) イエスは、エリコを通過された。
 - ①イエスは、脇道ではなく、エリコを通過してエルサレムに向かわれた。
 - ②イエスの決意が見て取れる。

2. 2節

Luk 19:2 するとそこに、ザアカイという名の人がいた。彼は取税人のかしらで、金持ちであった。

- (1) エリコには、多くの取税人がいた。
 - ①国境の町で、通行税を徴収する収税所があった。
 - ②パレスチナで最も裕福な町の1つで、物品税の徴収額も多かった。
- (2) ザアカイは、取税人のかしらであった。
 - ①彼は、通行税や物品税を徴収する権利をローマから委託されていた。
 - ②その仕事のために、複数の取税人を雇っていた。
 - ③彼はごまかしを行い、その結果、裕福になっていた。
 - ④彼は、同胞のユダヤ人たちから憎まれていた。

II. 承—木に登るザアカイ（3～4節）

1. 3節

Luk 19:3 彼はイエスがどんな方かを見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。

- (1) 彼は、イエスに興味を示した。
 - ①イエスの弟子の中には、元取税人がいるというではないか。
 - ②イエスは、取税人たちとの交流を喜んでいるというではないか。

(2) ザアカイの特徴

- ①ザアカイ（ザカイオス）とは、「pure」（清い、純粹）という意味である。
- ②彼の両親は我が子を見て、「pure」と名づけた。
- ③しかし彼は、ある時点で、ローマに魂を売り渡した。
- ④彼は、裕福になったが、心に渴きを覚えていたと思われる。
- ⑤彼は、背が低かった。

*当時の平均身長から判断すると、恐らく 150 cm くらいであろう。

- ⑥群衆に遮られて、イエスを見ることができなかった。

*人々からの意図的な嫌がらせもあったと思われる。

2. 4 節

Luk 19:4 それで、先の方に走って行き、イエスを見ようとして、いちじく桑の木に登った。イエスがそこを通り過ぎようとしておられたからであった。

- (1) 彼は、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。

- ①亜熱帯気候の中で多くの木が育っていた。ナツメヤシ、いちじく桑の木。
- ②いちじく桑は、枝が幹の低い所から出ているので、登りやすい。
- ③彼は、高所からイエスを眺めようとした。

III. 転—ザアカイを見上げるイエス (5 節)

1. 5 節

Luk 19:5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから。」

- (1) イエスは、ザアカイを見上げた。

- ①ザアカイは、イエスの視線を感じた。
- ②これは、罪人が神を認識する最初のステップである。

- (2) イエスは、ザアカイの名を呼んだ。

- ①ザアカイは、イエスが自分の名を知っていることに驚いたであろう。
- ②ユダヤ的には、会ったことのない人の名を知っているのは預言者である。
- ③神は、私たちの名を知っておられる。

- (3) イエスは、ザアカイを招いた。

- ①取税人は、ユダヤ社会では罪人であり、排除されるべき人間である。
- ②しかしイエスは、ザアカイに愛を示された。

(4) イエスは、彼の家に泊まることにしてあると言われた。

①いかに高貴な人物であっても、自分から宿泊を願い出ことはなかった。

②イエスは、自らそれを申し出た。福音書の中で、ここだけである。

(5) 「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから」(5節)

①ギリシア語の「dei」ということば

② It is necessary for me to stay at your house.

③I must abide at thy house.

④しかも、「今日」(セイメロン) ということばが強調されている。

IV. 結—イエスを家に迎えるザアカイ (6~10節)

1. 6節

Luk 19:6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。

(1) イエスの招きは、ザアカイが予想もしなかったことである。

①彼は、急いで降りて来た。

②彼は、大喜びでイエスを家に迎えた。

(2) 「喜ぶ(カイロウ)」(名詞はカラ) は、この書に9回出てくる。

①これは、信仰と救いに関連した喜びの状態を表現することばである。

②イエスのことばを受け入れた時点で、ザアカイは新生した。

*新生したという事実は、行為となって表れた。

*新生は瞬間的出来事であり、聖化は長期にわたるプロセスである。

2. 7節

Luk 19:7 人々はみな、これを見て、「あの人は罪人のところに行って客となった」と文句を言った。

(1) エリコの町には、イエスが泊まるのにふさわしい場所がいくつもあった。

①伝統的に、エリコは祭司たちの町でもある。

(2) しかし、イエスが選んだ場所は、罪人の家であった。

①ラビたちは、取税人の家には泊まらなかった。

②取税人は、什一献金を献げていないと推定されたからである。

3. 8節

Luk 19:8 しかし、ザアカイは立ち上がり、主に言った。「主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。」

(1) ザアカイの公の宣言

- ①財産の半分を貧しい人たちに施す。
- ②脅し取った物があれば、4倍にして返す。
- ③これは、モーセの律法の要求以上のものである。
 - *脅し取った場合は、120%の返済（レビ6:5、民5:7）。
 - *家畜や物を盗んだ場合は、200%の返済（出22:4、22:7）。
- ④罪の赦しを受けても、弁済の義務はある。

4. 9～10節

Luk 19:9 イエスは彼に言われた。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」

Luk 19:10 人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」

(1) ザアカイの変化は、彼が救われたことを証明している。

- ①ザアカイの救いは、「今日」起こったことである。

(2) 「この人もアブラハムの子なのですから」

- ①パリサイ人たちは、アブラハムの子孫であれば神の国に入れると教えていた。
- ②しかし、取税人はその特権から外されていた。
- ③ザアカイは、アブラハムの子孫であり、アブラハムの信仰に倣う者となった。
- ④ザアカイは、信仰によって救われたのである。

(3) 「人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです」

- ①これは、イエスが受肉された目的である。

結論：ザアカイは、救われる人の特徴を体現している。

1. たとえ話の中の取税人に似ている（18:9～14）。

(1) パリサイ人の祈り

- ①自分の自慢である。
- ②他者との比較に基づく祈りである。
- ③自己義認の祈りである。

(2) 取税人の祈り

- ①神の基準に基づく祈りである。
- ②自分の罪に焦点を合わせた祈りである。
- ③自分に誇れる点は何もないという認識から出た祈りである。
- ④神に届く祈りである。
- ⑤ザアカイも、自分は罪人であるという認識を持っていた。

2. 富める若者に似ている（18：18～23）。

(1) この若者とザアカイは、ともに裕福であった。

(2) しかし、違いもあった。

①この若者は、イエスの招きに応答しなかった。

* 富がこの若者を束縛していた。

②ザアカイは、イエスの招きに応答した。

* 富の束縛から解放された。

3. 「神にはできる」という真理の実例である（18：25～27）。

(1) 「人にはできないことが、神にはできるのです」（18：27）

(2) 人間には不可能なことを、神はなさる。

①金持ちが救われるのは、難しい。

* 見える物に信頼しているので、見えない神を信頼することができない。

* 貧しい人たちに対する優越感を持っている。

②神だけが、金持ちの救いを可能にしてくださる。

* 神は、人の心に罪の意識と悔い改めを与えてくださる。

4. 癒やされた目の見えない人に似ている（18：35～43）。

(1) 目の見えない人は、「今日」という機会を逃さなかった。

①ザアカイも、「今日」という機会を逃さなかった。

(2) 救われた後の従順

①見えるようになった人は、神をあがめながらイエスについて行った。

②これを見て、民はみな神を賛美した。

③ザアカイも、救われた者の責務をよく理解した。

④彼は、神をあがめる生活を始めた。

ルカの福音書 85回

ミナのたとえ話 ー再臨を待ち望む生活ー

19：11～27

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ 18：9～19：27 は、「エルサレムへの旅」の結論部分である。
- ③ルカ 18：8

Luk 18:8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

- ④結論部分での強調点：救われるのはどういう人か。
- ⑤ザアカイの救い（19：1～10）は、結論部分のクライマックスである。
- ⑥ミナのたとえ話（19：11～27）は、終末論的な内容である。

(2) この聖書箇所の特徴

- ①ザアカイの救いに続くイエスの教えである。
- ②イエスは、十字架上で死のうとしている。
- ③神の国は、すぐに来るのではない。
- ④再臨の時まで、弟子たちには果たすべき使命がある。

2. アウトライン

- (1) まえがき（11節）
- (2) 遠い国への旅立ち（12～14節）
- (3) 遠い国からの帰還（15～23節）
- (4) まとめ（24～27節）

3. 結論

- (1) タラントのたとえ話（マタ 25：14～30）との対比
- (2) クリスチャンが受ける裁き

ミナのたとえ話について学ぶ。

I. まえがき（11節）

1. 11節

Luk 19:11 人々がこれらのことばに耳を傾けていたとき、イエスは続けて一つのたとえを話

された。イエスがエルサレムの近くに来ていて、人々が神の国がすぐに現れると思っていたからである。

(1) このたとえ話は、ザアカイの家の食卓での講話である。

- ①イエスは、「今日、救いがこの家に来ました」と言われた。
- ②イエスは、エルサレムの近くまで来ていた。
- ③人々は、神の国の到来が近いと思い込んでいた。
 - *神の国とは、メシア的王国である。
 - *メシアは、ローマの圧制からの解放をもたらすという期待があった。
 - *弟子たちも、同じ期待を抱いていた。
- ④イエスは、神の国に関する誤解を解くために、このたとえ話を語られた。

(2) 神の国について

- ①ユダヤ人たちの希望は、地上に設立される神の国にあった。
- ②旧約聖書の預言のピークは、神の国の成就である。
- ③弟子たちの神の国への執着は、相当なものである。
- ④使1:6

Act 1:6 そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。「主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」

- ⑤イエスの教えは、神の国はすぐには来ないというものである。
- ⑥では、神の国が成就するまでの期間、弟子としていかに生きるべきか。

II. 遠い国への旅立ち (12~14 節)

1. 12 節

Luk 19:12 イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が遠い国に行った。王位を授かって戻って来るためであった。」

(1) このたとえ話には、歴史的背景があった。

- ①ヘロデは、ユダヤの王としての称号を得るためにローマに行った（前40年）。
 - *彼は、ユダヤの民衆からの支持を得ていなかった。
 - *称号を得て後、ヘロデは残虐な方法で反抗的な人々を沈黙させた。
- ②ヘロデの息子アルケラオも、王になるためにローマに行った（前4年）。
 - *ユダヤ人の代表50人が反対を表明するためにローマに行った。
 - *ユダヤ王国のエスニャルク（統治者）となった彼は、忠実な者に報奨を与え、反抗する者を殺害した。

(2) このたとえ話では、「ある身分の高い人」とはイエスのことである。

- ①イエスは、父なる神のもとに行き、やがて王として地上に戻って来られる。
- ②初臨と再臨の間の期間、弟子たちには忠実に生きることが要求される。

2. 13節

Luk 19:13 彼はしもべを十人呼んで、彼らに十ミナを与え、『私が帰って来るまで、これで商売をなさい』と言った。

- (1) 10人は概数であろう。12弟子以外の信者も含まれる。
 - ①再臨までの期間に、彼らにはある賜物が委託されている。
 - ②各人が、1ミナを預かった。
 - *1ミナは、労働者100日分の賃金である。
 - ③ローマ時代、資産を持っている人は少数であった。
 - *金貸しはほとんどが裕福な個人によって行われていた。
 - *「トラペザ」(23節)を銀行と訳しているが、これは両替商の机である。
 - *金利は、非常に高かった。
- (2) 主人の意図は、1ミナを元手に商売をして財産を増やすことであった。
 - ①財産を増やすのは、今よりもはるかに容易だった。

3. 14節

Luk 19:14 一方、その国の人々は彼を憎んでいたので、彼の後に使者を送り、『この人が私たちの王になるのを、私たちは望んでいません』と伝えた。

- (1) 「その国の人々」
 - ①人々は、アルケラオが王になることに反対し、アウグストゥスに上訴した。
 - ②アルケラオは父の領土の半分を継承し、王でなく「エスニャルク」となった。
 - *4分の1の継承者は、「テトラーク」(領主)である。
- (2) 彼らは、イエスをメシアと認めたくない人たちである。
 - ①狭義には宗教的指導者たちであり、広義にはイスラエルの民全般である。
 - ②使徒の働きでは、ステパノや使徒たちが殉教の死を遂げるようになる。

III. 遠い国からの帰還 (15～23節)

1. 15節

Luk 19:15 さて、彼は王位を授かって帰って来ると、金を与えておいたしもべたちを呼び出すように命じた。彼らがどんな商売をしたかを知ろうと思ったのである。

- (1) 身分の高い人は王位を受けて帰って来た。

①これは、王として戻って来られる再臨のキリストの型である。

(2) しもべたちは、どのように商売をしたかを吟味される。

①これは、キリストの御座の裁きの型である。

2. 16～17 節

Luk 19:16 最初のしもべが進み出て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで十ミナをもうけました。』

Luk 19:17 主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。おまえはほんの小さなことにも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』

(1) 最初のしもべは、1 ミナを元手にして 10 ミナを儲けた。

①主人は、彼をほめた。

②主人は、「ほんの小さなこと」ということばを使った。

(2) 忠実さに比例して、多くの責任が与えられた。

①彼は、10 の町を支配する者になる。

②ローマ帝国は、認定した王が独自に行政官を任命することを許可していた。

③この責任委譲は、千年王国での責任委譲の型である。

3. 18～19 節

Luk 19:18 二番目のしもべが来て言った。『ご主人様、あなた様の一ミナで五ミナをもうけました。』

Luk 19:19 主人は彼にも言った。『おまえも五つの町を治めなさい。』

(1) 2番目のしもべは、1 ミナを元手にして 5 ミナを儲けた。

①彼も、最初のしもべと同じ原則で取り扱われた

4. 20～21 節

Luk 19:20 また別のしもべが来て言った。『ご主人様、ご覧ください。あなた様の一ミナがございます。私は布に包んで、しまっておきました。』

Luk 19:21 あなた様は預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取られる厳しい方ですから、怖かったのです。』

(1) 3番目のしもべは、何もしなかった。

①「布」とは、汗をぬぐう布のことである。ハンカチ、ナプキンなど。

②これは、主人の財産を扱う方法としては、最も危険なものである。

③彼は、永遠の価値のあることを何もしない人の型である。

(2) 彼は言い訳をした。

- ①主人に対する侮辱的なことばを吐いた。
- ②実際は、主人が戻って来るとは思わなかったのであろう。

5. 22～23 節

Luk 19:22 主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私がおまえのことばによって、おまえをさばこう。おまえは、私が厳しい人間で、預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取ると、分かっていたというのか。』

Luk 19:23 それなら、どうして私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうしておけば、私が帰って来たとき、それを利息と一緒に受け取れたのに。』

(1) 主人は、3番目のしもべの口実をそのままくり返した。

- ①それを認めたということではなく、彼の欺瞞を指摘したのである。
- ②本当にそう思っていたなら、高利貸しに預けておくべきだった。
- ③もしそうしていたなら、最低限の金利は受け取れた。

IV. まとめ (24～27 節)

1. 24～26 節

Luk 19:24 そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナをこの者から取り上げて、十ミナ持っている者に与えなさい。』

Luk 19:25 すると彼らは、『ご主人様、あの人はすでに十ミナ持っています』と言った。

Luk 19:26 彼は言った。『おまえたちに言うが、だれでも持っている者はさらに与えられ、持っていない者からは、持っている物までも取り上げられるのだ。』

(1) 3番目の人の1ミナは、10ミナ持っている人に与えられる。

- ①そばに立っていた者たちは、そうする理由を理解することができない。

(2) 神の国の原則

- ①「持っている者はさらに与えられ、持っていない者からは、持っている物までも取り上げられる」
- ②この原則には、現代的適用と終末的適用がある。

3. 27 節

Luk 19:27 またさらに、私が王になるのを望まなかったあの敵どもは、ここに連れて来て、私の目の前で打ち殺せ。』

(1) あの敵どもとは、「その国の人々」(14節)のことである。

- ①彼らは、殺された。
- ②これは、不信仰なイスラエルがどのような裁きを受けるかを予告したものの。
- ③イエスは、紀元70年のエルサレム崩壊を予見しておられた。

結論

1. タラントのたとえ話（マタ 25：14～30）との対比

(1) 主人はしもべたちに、異なった量のタラントを預けた。

- ①5タラント、2タラント、1タラント
- ②与えられている賜物の違いが強調されている。

(2) ミナのたとえ話

- ①全員に1ミナを預けた。
- ②誰もが「人生における可能性」を持っていることを示唆している。

*福音を伝える特権、祈りの特権、献金の特権

- ③持てる者にはより多くのものが委ねられる。

2. クリスマンが受ける裁き

(1) 携挙の後、信者は人の子の前に立つ（ルカ 21：34～36）。

- ①これは、信者の報奨のための裁きであって、罪の裁きではない。

(2) 2 コリ 5：10

2Co 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。

- ①裁きの基準は、信者になって以降の行為である。
- ②罪の裁きではない（ロマ 8：1）。

(3) 1 コリ 3：10～15

- ①土台（キリスト）の上にとどのような建物を建てたかが裁きの基準となる。
- ②神の御心に沿った働きは、金、銀、宝石である。
- ③告白されていない罪を持った生活は、木、草、わらである。
- ④各人の働きは、火で試される。
- ⑤木、草、わらなどは燃えて灰になる。
- ⑥金、銀、宝石は精錬され、より純化される。

(4) 私たちへの適用

- ①今私たちは、初臨と再臨の間の時代に生きている。
- ②忠実な奉仕の動機は、主からの「おほめのことば」である。
- ③忠実なしもべには、より多くの責務が与えられる。
- ④この原則は、今だけでなく、終末論的な適用を持っている。

ルカの福音書 86回

勝利の入城 —エルサレムを見て号泣するイエス—

19：28～44

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ついにイエスは、メシアとしてエルサレムに入る。
- ②ルカは、イエスが逮捕される前の状況を記録している。

(2) エルサレムでの奉仕（19：28～21：38）

- ①勝利の入城（19：28～44）
- ②諸々の教え（20：1～21：4）
- ③神殿崩壊の予告（21：5～36）
- ④まとめ（21：37～38）

2. アウトライン

- (1) 入城の準備（28～35節）
- (2) 人々の歓迎（36～38節）
- (3) パリサイ人たちの抗議（39～40節）
- (4) イエスの嘆き（41～44節）

3. 結論：イエスのあわれみ

勝利の入城について学ぶ。

I. 入城の準備（28～35節）

1. 28節

Luk 19:28 これらのことを話してから、イエスはさらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。

- (1) ルカは、再び地理的情報を提供している。
 - ①イエスは、エリコからエルサレムに向かう。
 - ②この道程は、西に向かう上り道である。
- (2) 勝利の入城は、4福音書のすべてに出てくる。
 - ①それ以外にパンと魚の奇跡がある。

(3) 「勝利の入城」と呼ばれるが、実態はそうではない。

- ①弟子たちは御国の設立を期待していたが、イエスは十字架に向かっておられた。
- ②イエスは、エルサレムの崩壊を予知しておられた。
- ③ルカは、イエスの悲しみに焦点を合わせている。

2. 29～30 節

Luk 19:29 オリーブという山のふもとにベテパゲとベタニアに近づいたとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。

Luk 19:30 「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどいて、連れて来なさい。

(1) オリーブ山のふもとにベテパゲとベタニアという村があった。

- ①ベテパゲのほうがエルサレムに近い。
- ②これは、異邦人読者のための情報である。
- ③イエスが弟子を派遣するときは、ふたり一組である。

(2) イエスは、子ろばを必要とされた。

- ①ろばは、祭司、貴族、平和の使者たちの乗り物である。
- ②王の乗り物は、馬である。
- ③イエスは、平和の君としてエルサレムに入城される。
- ④ゼカ 9:9

Zec 9:9 娘シオンよ、大いに喜べ。／娘エルサレムよ、喜び叫べ。／見よ、あなたの王があなたのところに来る。／義なる者で、勝利を得、／柔和な者で、ろばに乗って。／雌ろばの子である、ろばに乗って。

3. 31 節

Luk 19:31 もし『どうして、ほどくのか』とだれかが尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」

(1) 子ろばの持ち主たちとは、あらかじめ打ち合わせができていたのであろう。

- ①「主がお入り用なのです」という合言葉が、すべてを解決する。
- ②主イエスは、子ろばの究極的な持ち主である。

4. 32～34 節

Luk 19:32 使いに出された二人が行って見ると、イエスが言われたとおりであった。

Luk 19:33 彼らが子ろばをほどいていると、持ち主たちが、「どうして、子ろばをほどくのか」と彼らに言った。

Luk 19:34 弟子たちは、「主がお入り用なのです」と言った。

- (1) イエスが話されたとおりのことが起こった。
 - ①持ち主は、複数形である。「持ち主たち」である。
 - ②彼らが、ろばと、子ろばを大切にしていたことが分かる。
 - ③メシアに自分たちの持ち物を提供できるのは、特権である。
- (2) イエスの貧しさは、読者に好印象を与えた。
 - ①当時の人たちの大半が、初代教会の信者も含めて、非常に貧しかった。
 - ②子ろばを借りなければ入城できないメシアに、親近感を覚えたことであろう。

5. 35 節

Luk 19:35 二人はその子ろばをイエスのもとに連れて来た。そして、その上に自分たちの上着を掛けて、イエスをお乗せした。

- (1) マタ 21 : 7

Mat 21:7 ろばと子ろばを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。そこでイエスはその上に座られた。

- ①母ろばが子ろばのそばを歩いた。
 - ②子ろばが暴れないのは、小さな奇跡である。
- (2) 弟子たちは、母ろばと子ろばの両方に上着を掛けた。
 - ①弟子たちは、イエスに敬意を表した。
 - ②上着を掛けるのは、鞍を作るためである。

II. 人々の歓迎 (36~38 節)

1. 36 節

Luk 19:36 イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。

- (1) イエスは、オリーブ山の西側をエルサレムに向かって下って行かれた。
 - ①下り切った所が、キデロンの谷である。
- (2) 道に上着を敷くのは、王に対する敬意の表現である。
 - ①ルカは、人々が葉の付いた枝（しゅろの枝）を振ったことは省略している。
 - ②葉の付いた枝を振るのは、仮庵の祭りのときの習慣である。
 - ③人々は、メシア的王国の成就が近いと思い込んでいた。

2. 37~38 節

Luk 19:37 イエスがいよいよオリーブ山の下りにさしかかると、大勢の弟子たちはみな、自分たちが見たすべての力あるわざについて、喜びのあまりに大声で神を賛美し始めて、

Luk 19:38 こう言った。／「祝福あれ、／主の御名によって来られる方、王に。／天には平和があるように。／栄光がいと高き所にあるように。」

(1) 大勢の弟子たちが叫んだ。

- ①彼らは、多くの奇跡を目撃してきた。
- ②そのことのゆえに、大声で神を賛美し始めた。
- ③彼らもまた、イエスがメシア的王国を建設されると思い込んでいた。

(2) 賛美の内容

- ①「主の御名によって来られる方、王」とは、メシアのことである。
- ②これは、メシアを迎えるときの賛美である。
- ③パリサイ人たちは、危機感を覚えた。

III. パリサイ人たちの抗議 (39～40 節)

1. 39 節

Luk 19:39 するとパリサイ人のうちの何人かが、群衆の中からイエスに向かって、「先生、あなたの弟子たちを叱ってください」と言った。

(1) パリサイ人たちは、何が起きているかを理解した。

- ①イエスは、自分自身をメシアとして公表している。
- ②弟子たちは、メシアを歓迎する聖句を引用して、大声で叫んでいる。
- ③人々も、イエスをメシアとして歓迎している。

(2) パリサイ人たちはすでにイエスのメシア性を拒否していた。

- ①そこで彼らは、弟子たちを叱って黙らせるようにイエスに要請した。
- ②彼らは、イエスもそれに同意するだろうと思ったのであろう。

2. 40 節

Luk 19:40 イエスは答えられた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」

(1) イエスは、弟子たちを叱らなかった。

- ①これまでは、「今見たことを言ってはならない」という命令があった。
- ②ここでは、イエスがメシアであることが明確に示された。

(2) 人間が黙ったとしても、無生物である石が叫び出すことであろう。

- ①これは、「不可能なことが起こる」という意味の格言である。
- ②ここでは、石は城壁の石、あるいは神殿の石を指すと思われる。

IV. イエスの嘆き (41～44 節)

1. 41 節

Luk 19:41 エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。

- (1) イエスはエルサレムを見て、泣いて、言われた。
 - ①この部分は、ルカだけの記録である。
 - ②外面的繁栄と内面的腐敗（不信仰）の乖離があった。
 - ③このことが「宮きよめ」と「神殿での教え」につながる。

2. 42 節

Luk 19:42 「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。

- (1) 「平和に向かう道」とは、イエスをメシアとして信じることである。
 - ①しかし、ユダヤ人たちは霊的に目が見えなくなっていた。
 - ②エルサレムがイエスを拒否したので、イエスもエルサレムを拒否される。

3. 43～44 節

Luk 19:43 やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、

Luk 19:44 そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。」

- (1) 紀元 70 年に起こることの預言が語られる。
 - ①ローマ軍がエルサレムに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せる。
 - ②ローマ軍がエルサレムの住民を虐殺する。
 - ③エルサレムは完全に崩壊する。
- (2) その理由は、「神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ」。
 - ①イエスは、救いのメッセージを持ってエルサレムを訪れた。
 - ②神の民は、それを歓迎しなかった。
 - ③彼らは、自分たちの考え方や願いを優先させた。

結論：イエスのあわれみ

1. ヨハネの福音書 11 章 35 節

Joh 11:35 イエスは涙を流された。

- (1) 「涙を流された」は、ギリシア語の「ダクルオウ」という動詞である。
- (2) 涙が溢れ出たということである。
- (3) ラザロの死を悲しむ人たちへの同情心の表れである。

2. ルカの福音書 19 章 41 節

Luk 19:41 エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。

- (1) 「泣いて」は、ギリシア語の「クライオウ」である。
- (2) 声を上げながら、涙を流す。

3. 勝利の入城に際してのイエスの感情

- (1) イエスは、メシアを歓迎する祈りを受け入れた。
 - ①イエスは、弟子たちを黙らせなかった。
- (2) 創3:15の「女の子孫」の約束以来、歴史はこの日に向かって進んできた。
 - ①イエスの誕生も公生涯も、すべてこの日のためであった。
- (3) しかし、イエスはエルサレムを見て号泣された。
 - ①エルサレムが、神の訪れの時を知らなかったからである。
- (4) 自問自答してみよう。
 - ①イエスは、日本をどう見ておられるのか。
 - ②イエスは、私をどう見ておられるのか。

ルカの福音書 87回

宮きよめとイエスの権威 —イエスを信じる理由—

19：45～20：8

1. はじめに

(1) エルサレムでの奉仕 (19：28～21：38)

- ①勝利の入城 (19：28～44)
- ②諸々の教え (19：45～21：4)
- ③神殿崩壊の予告 (21：5～36)
- ④まとめ (21：37～38)

(2) 諸々の教え (19：45～21：4)

- ①宮きよめ (19：45～46)
- ②イエスの教えの要約 (19：47～48)
- ③権威に関する論争 (20：1～8)
- ④ぶどう園の農夫のたとえ話 (20：9～19)
- ⑤カエサルへの納税に関する質問 (20：20～26)
- ⑥復活に関する質問 (20：27～40)
- ⑦ダビデの子に関する質問 (20：41～44)
- ⑧律法学者の偽善 (20：45～47)
- ⑨やもめの献金 (21：1～4)

2. アウトライン

- (1) 宮きよめ (19：45～46)
- (2) イエスの教えの要約 (19：47～48)
- (3) 権威に関する論争 (20：1～8)

3. 結論

- (1) イエスの権威
- (2) 使徒たちの権威
- (3) 説教者の権威

宮きよめとイエスの権威について学ぶ。

I. 宮きよめ (19：45～46)

- 1. 45～46節

Luk 19:45 それからイエスは宮に入って、商売人たちを追い出し始め、

Luk 19:46 彼らに言われた。『わたしの家は祈りの家でなければならない』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にした。」

(1) イエスは、宮きよめを2度行われた。

- ①公生涯の始まりでの宮きよめ（ヨハ2：13～22）
- ②公生涯の終わりでの宮きよめ（共観福音書すべて）
- ③メシアが公生涯の最初と最後に宮きよめを行うのは、当然のことである。
- ④この行為の背後には、イエスの涙がある。

(2) エルサレムの上を下る裁きは、商売人たちを追い出すところから始まった。

- ①神殿では、いけにえの動物が高値で販売されていた。
- ②それを買うために、神殿で使用できる通貨に両替してもらう必要があった。
- ③大祭司の一家が、一連のビジネスから利益を得ていた。
- ④その結果、礼拝が形式的なものになっていた。

(3) イエスは、イザヤ書56章7節とエレミヤ書7章11節から引用した。

①イザ56：7

Isa 56:7 わたしの聖なる山に来させて、／わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。／彼らの全焼のさきげ物やいけにえは、／わたしの祭壇の上で受け入れられる。／なぜならわたしの家は、／あらゆる民の祈りの家と呼ばれるからだ。

②エレ7：11

Jer 7:11 わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目に強盗の巣と見えたのか。見よ、このわたしもそう見ていた——【主】のことば——。

(4) ルカの記録は、他の福音書の記録と比べると、短い。

- ①神殿での諸々の教えの舞台設定になっている。
- ②宗教的指導者たちがイエスに対して敵対心を抱いたことの説明になっている。
- ③ルカは、「あらゆる民の祈りの家」ということばを、「祈りの家」としている。
- ④ルカは、異邦人が誤解しないように配慮しているのであろう。

*神殿が「あらゆる民の祈りの家」となるのは、メシア的王国において。

II. イエスの教えの要約 (19：47～48)

1. 47～48節

Luk 19:47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長たち、律法学者たち、そして民のおもだった者たちは、イエスを殺そうと狙っていたが、

Luk 19:48 何をしたらよいか分からなかった。人々がみな、イエスのことばに熱心に耳を傾けていたからである。

- (1) イエスは毎日、宮で教えておられた。
 - ①神殿内ではなく、「異邦人の庭」で教えた。
 - ②多くのラビたちが、そこで教えていた。

- (2) ルカの視点は、宗教的指導者たちと一般民衆の対比である。
 - ①この箇所は、次に続く「諸々の教え」のイントロダクションになっている。

- (3) 一般民衆は、イエスのことばに熱心に耳を傾けた。
 - ①利害関係がない人たちは、イエスの教えに心が開かれていた。
 - ②民衆は、イエスの周りに群がった。

- (4) 宗教的指導者たちは、イエスに対して殺意を抱いていた。
 - ①祭司長たち、律法学者たち、長老たち。
 - ②しかし、何をしたらよいか分からなかった。
 - ③イエスの時は、まだきていなかった。

III. 権威に関する論争 (20:1~8)

1. 1~2節

Luk 20:1 ある日、イエスが宮で人々を教え、福音を宣べ伝えておられると、祭司長たちと律法学者たちが長老たちと一緒にやって来て、

Luk 20:2 イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしているのか、あなたにその権威を授けたのはだれなのか、教えてくださいませんか。」

- (1) 権威というテーマは、ユダヤ人たちだけでなく、本書の読者にも重要である。
 - ①私たちは、なぜ福音を信じたのか。
 - ②私たちは、なぜメディアの報道を信じるのか。

- (2) 受難週におけるイエスの教え
 - ①イエスは、最後まで福音を宣べ伝えておられた。
 - ②これは「神の国の福音」である。

- (3) 宗教的指導者たちがいっしょにイエスのもとに来た。
 - ①祭司長たち、律法学者たち、長老たちは、サンヘドリンの議員たちである。
 - ②普段は利害が対立する者たちが、イエスに敵対するために一致した。

(4)「何の権威によって、これらのことをしているのか、あなたにその権威を授けたのはだれなのか、教えてくださいませんか。」

①2つの質問

*「あなたは自分を誰だと言うか」

*「あなたは誰から派遣されているのか」

②これは、サンヘドリンからの正式な質問である。

③これは、イエスを罠にかけるための質問である。

*もし神から権威を受けたと言え、冒とく罪で訴える。

*もし人から権威を受けたと言え、その主張は無効である。

④ユダヤ教では、ラビは、過去のラビたちの教えを引用する。

*それがラビの権威の源となる。

*しかしイエスは、ラビたちの教えを引用せず、聖書だけを引用した。

⑤彼らにとっては、イエスは大工の息子である。

*イエスは、専門的なラビ教育を受けたことがない。

⑥そのイエスが、神殿の雰囲気壊している。

2. 3～4節

Luk 20:3 イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。」

Luk 20:4 ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。」

(1) イエスは、質問をもって質問に答えた。

①これは、ラビ的対話法である。

②イエスは、論敵をジレンマに陥れる。

(2)「ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか」

①「天」とは「神」のことである。

②バプテスマのヨハネの奉仕は、神からのものか、人からのものか。

③ユダヤ人の指導者たちは、バプテスマのヨハネに敵対した。

④民衆は、バプテスマのヨハネに従った。

⑤バプテスマのヨハネの奉仕を否定したら、危険な目に遭う。

3. 5～6節

Luk 20:5 すると、彼らは論じ合った。「もし天からと言え、どうしてヨハネを信じなかったのかと言うだろう。」

Luk 20:6 だが、もし人からと言え、民はみな私たちに石で打ち殺すだろう。ヨハネは預言

者だと確信しているのだから。」

- (1) 彼らは、ジレンマに陥った。
 - ①ヨハネの権威は神からだと言え、ではなぜ信じなかったのかと言われる。
 - ②ヨハネの権威は人からだと言え、民衆は自分たちを石で打ち殺すだろう。

- (2) 偽預言者は、石打の刑に処せられる。
 - ①申 13 : 1～11
 - ②神からの預言者であるヨハネの権威を否定すれば、偽預言者と同じ罰を受ける。

4. 7～8 節

Luk 20:7 そこで、「どこから来たのか知りません」と答えた。

Luk 20:8 するとイエスは彼らに言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」

- (1) 指導者たちは、回答を避けた。
 - ①「どこから来たのか知りません」
 - ②これは、霊的指導者としての責任回避である。
 - ③彼らには、預言者を吟味する責務が与えられていた。

- (2) イエスは、彼らの回答拒否を理由に、自分も答えないと言われた。
 - ①「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません」
 - ②言外の意味は、明らかである。
 - *ヨハネの奉仕の権威は、神からのものである。
 - *ヨハネがメシアと認めたわたしは、神である。
 - ③イエスは、数々の奇跡によって自らがメシアであり、神であることを示された。
 - ④イエスの権威を認めないのは、その人自身の問題である。

結論

1. イエスの権威

(1) ルカ 20 : 2

Luk 20:2 イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしているのか、あなたにその権威を授けたのはだれなのか、教えてくださいませんか。」

- (2) 「これらのこと」
 - ①勝利の入城
 - ②民衆の賞賛を受けたこと

- ③宮きよめ
- ④神殿で教えていること
- ⑤神殿の雰囲気破壊していること
- (3) イエスの権威を証明するもの
 - ①メシア預言の成就
 - ②数々の奇跡
 - ③イエスの教え
 - ④イエスの復活

2. 使徒たちの権威

(1) 使4:7

Act 4:7 彼らは二人を真ん中に立たせて、「おまえたちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問した。

(2) 使徒たちの権威を証明するもの

- ①イエスからの召命
- ②聖霊の力
- ③イエスの死と復活の目撃者
- ④奇跡と癒し
- ⑤旧約聖書と一致した教え
- ⑥殉教

3. 説教者の権威

- (1) 使徒たちの教えを継承し、それを伝えるのが説教者の使命である。
- (2) 説教者の権威の範囲は、どこまでなのか。
 - ①ユダヤ的律法の原則が、きょうの箇所背景にある。
 - ②派遣された者は、派遣した者と同じ権威を行使できる。
 - ③その場合は、派遣された者は主人の意図に忠実に行動するという前提がある。
 - ④ヨハネは、神の御心に基づいて行動した。
 - ⑤イエスは、100%父の御心に従った。
- (3) 説教者の権威は無限ではなく、使徒たちの教えを語っている範囲に限定される。

ルカの福音書 88回
ぶどう園の農夫のたとえ話 ー神の国の延期ー
20：9～18

1. はじめに

(1) エルサレムでの奉仕が始まった（19：28～21：38）。

- ①勝利の入城（19：28～44）
- ②諸々の教え（19：45～21：4）
- ③神殿崩壊の予告（21：5～36）
- ④まとめ（21：37～38）

(2) 諸々の教え（19：45～21：4）

- ①宮きよめ（19：45～46）
- ②イエスの教えの要約（19：47～48）
- ③権威に関する論争（20：1～8）
- ④ぶどう園の農夫のたとえ話（20：9～18）
- ⑤カエサルへの納税に関する質問（20：19～26）
- ⑥復活に関する質問（20：27～40）
- ⑦ダビデの子に関する質問（20：41～44）
- ⑧律法学者の偽善（20：45～47）
- ⑨やもめの献金（21：1～4）

2. アウトライン

- (1) 農夫たちへの委託（9節）
- (2) 3人のしもべたちの派遣（10～12節）
- (3) 愛する息子の派遣（13～15節 a）
- (4) 適用（15b～18節）

3. 結論

- (1) 「彼をぶどう園の外に放り出して、殺してしまった」（15節）
- (2) 「ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう」（16節）
- (3) 「石」（18節）

ぶどう園の農夫のたとえ話について学ぶ。

I. 農夫たちへの委託（9節）

1. 9節

Luk 20:9 また、イエスは人々に対してこのようなたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を造り、それを農夫たちに貸して、長い旅に出た。

(1) イエスは、このたとえ話を、イエスの教えに好意的な人々に語られた。

①神のことばに積極的に応答するなら、より深い霊的真理を知るようになる。

②イエスを信じない者には、このたとえ話は意味不明であろう。

③このたとえ話の要点

*宗教的指導者たちは、権威を誤用している。

*イエスは預言者よりも権威を持ったお方、神の子である。

*イエスは、殺される。

*イエスの弟子には、忠実な管理者としての責務がある。

(2) 当時の主人と農夫の関係

①ローマ帝国の郊外の地（田舎）は、そのほとんどが地主の所有地であった。

②地主は都市生活をし、畑は農夫に委ね、その収穫で裕福な生活をしていた。

*奴隷を使って、農業を営むこともあった。

*畑を貸す場合の相手は、小作農（自由人）であった。

③寛大な地主は人々から尊敬されたが、そのような地主は稀であった。

④このたとえ話に登場する地主は、非常に寛大である。

*こういう地主は、下層階級からは尊敬され、貴族階級からは軽蔑された。

⑤地主は、苦勞してぶどう畑を開墾した（マタ 21 : 33）。

(3) このたとえ話の背景には、イザ 5 : 1~2 がある。

Isa 5:1 「さあ、わたしは歌おう。／わが愛する者のために。／そのぶどう畑についての、わが愛の歌を。／わが愛する者は、よく肥えた山腹に／ぶどう畑を持っていた。

Isa 5:2 彼はそこを掘り起こして、石を除き、／そこに良いぶどうを植え、／その中にやぐらを立て、／その中にぶどうの踏み場まで掘り、／ぶどうがなるのを心待ちにしていた。／ところが、酸いぶどうができてしまった。

(4) このたとえ話に出てくる用語の意味

①主人は、父なる神。

②ぶどう園は、イスラエル。

③農夫は、イスラエルの指導者たち。

④収穫の時は、御国の開始。

⑤収穫は、神が神の民に期待する霊的実。

⑥しもべたちは、預言者たち。

⑦愛する息子は、イエス。

II. 3人のしもべたちの派遣 (10～12節)

1. 10節

Luk 20:10 収穫の時になったので、彼は農夫たちのところに一人のしもべを遣わした。ぶどう園の収穫の一部を納めさせるためであった。ところが農夫たちは、そのしもべを打ちたたき、何も持たせないで帰らせた。

(1) 収穫の時の小作料の徴収

- ①小作農は、収穫の時に主人に対して、あらかじめ決められているものを支払う。
- ②収穫量であったり、率であったりした（最低25%以上）。
- ③力があるのは小作農ではなく、主人の方である。
- ④問題のある小作農に対応するために、私兵集団を擁していた主人もいた。

(2) 農夫の反抗

- ①ここでは、農夫たちは、力のある者のように振る舞っている。
- ②これは、寛大な主人に対する反抗である。
- ③農夫たちは、主人が遣わしたしもべを苦しめた。

(3) 最初のしもべは、捕囚期前の預言者たちである。

- ①農夫たちは、最初のしもべを打ちたたき、何も持たせないで帰らせた。

2. 11節

Luk 20:11 そこで別のしもべを遣わしたが、彼らはそのしもべも打ちたたき、辱めたうえで、何も持たせないで帰らせた。

(2) 次のしもべは、捕囚期後の預言者たちである。

- ①「辱めたうえで」ということばが追加されている。

3. 12節

Luk 20:12 彼はさらに三人目のしもべを遣わしたが、彼らはこのしもべにも傷を負わせて追い出した。

(1) 三人目のしもべは、バプテスマのヨハネとイエスの弟子たちである。

- ①農夫たちは、このしもべにも傷を負わせて追い出した。

III. 愛する息子の派遣 (13～15節 a)

1. 13節

Luk 20:13 ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。そうだ、私の愛する息子を送ろう。この子なら、きっと敬ってくれるだろう。』

- (1) ルカは、この部分を主人の独白として紹介する。
 - ①この文学形式は、内容伝達に「情感」を加えることができる。
 - ②「私の愛する息子」とは、イエスのことである。
 - ③神は、そのひとり子をこの世に遣わされた。
 - ④神は、イスラエルの指導者たちがイエスを受け入れることを期待された。

2. 14～15節 a

Luk 20:14 ところが、農夫たちはその息子を見ると、互いに議論して『あれは跡取りだ。あれを殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる』と言った。

Luk 20:15a そして、彼をぶどう園の外に放り出して、殺してしまった。

- (1) 農夫たちは、その息子が跡取りであることを認識したうえで、殺した。
 - ①彼らは、主人の財産を自分のものにしようとした。
 - ②民衆は神の所有物であり、神から指導者たちに委ねられていた。
 - ③指導者たちは、民衆を自分の所有物にしようとした。
 - ④これは、管理者としては最悪の姿である。
 - ⑤彼らは、息子をぶどう園の外に放り出し、殺した。
- (2) 指導者たちは、イエスが神の子であることを知っていた。
 - ①しかし、彼らはそれを公に認めなかった。

IV. 適用 (15b～18節)

1. 15b～16節

Luk 20:15b こうなったら、ぶどう園の主人は彼らをどうするのでしょうか。

Luk 20:16 主人はやって来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。／これを聞いた人たちは、「そんなことが起こってはなりません」と言った。

- (1) イエスの質問は、聴衆（指導者たち）に考えさせるためのものである。
 - ①主人はその農夫たちをどうするだろうかというのは、当然の質問である。
 - ②ルカの記録では、イエス自身が答えている。
 - ③主人は農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人に与えるでしょう。
- (2) 人々は、「そんなことが起こってはなりません」と言った。
 - ①彼らは、イスラエルという国の消滅を予感した。

②彼らは、ユダヤ教の終わりを予感した。

2. 17～18節

Luk 20:17 イエスは彼らを見つめて言われた。「では、／『家を建てる者たちが捨てた石、／それが要の石となった』／と書いてあるのは、どういうことなのか。」

Luk 20:18 だれでもこの石の上に落ちれば、粉々に砕かれ、またこの石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」

(1) イエスは、彼らを見つめて言われた。

①イエスの教えの厳しさが表現されている。

(2) イエスは、人々の拒否反応に答えるために、詩118:22を引用された。

Psa 118:22 家を建てる者たちが捨てた石／それが要の石となった。

①人々が最も評価しないものが、最も大切なものとなる。

②メシアは拒否されるが、最後には重要な役割を果たすようになる。

(3) この石は、裁きの手段ともなる。

①初臨のメシアにつまずく者は、不信仰のゆえに粉々に砕かれる。

*これは、紀元70年のエルサレム崩壊の預言である。

②再臨のメシアは、諸国を裁くために来られる。

*ダニエル書2章の預言どおりである。

結論

1. 「彼をぶどう園の外に放り出して、殺してしまった」(15節)

(1) イエスが門の外で苦しみを受けることの預言である。

(2) ヘブ13:11～12

Heb 13:11 動物の血は、罪のきよめのささげ物として、大祭司によって聖所の中に持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるのです。

Heb 13:12 それでイエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。

①贖罪の日に、罪のきよめのささげ物が献げられる。

②血は、罪を清める供え物である。

③しかし、からだは宿営の外（汚れた地）で焼かれる。

④イエスの犠牲もこれと同じである。

*イエスは、門の外（汚れた地）で苦しみました。

*イエスの血は、私たちの罪を清める。

⑤それゆえ、イエスが苦しまれたように門の外で苦しみを受けようではないか。

2. 「ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう」（16節）

(1) この聖句は、置換神学の根拠とされることが多い。

①神の国は、ユダヤ人から取り去られ教会に与えられる。

(2) 文脈を考慮した正しい解釈とは何か。

①神の国は、イエス時代の指導者たちから取り去られる。

②神の国は、将来の世代（大患難時代）の信仰ある指導者たちに与えられる。

*マタ 21 : 43 では、「神の国の実を結ぶ民に与えられます」となっている。

*ここでの「民」（エスノス）は、将来の世代の意味である。

3. 「石」（18節）

(1) 「だれでもこの石の上に落ちれば」

①初臨のメシアにつまずく者は、滅びる。

②イザ 8 : 13~15

*イスラエルにとっては、イエスは妨げの石、つまずきの岩となる。

*多くの者がつまずき、倒れて打ち砕かれ、畏にかかって捕らえられる。

(2) 「この石が人の上に落ちれば」

①再臨のメシアは、諸国を裁く。

②ダニ 2 : 35、44

*バビロンの王ネブカドネツアルは、巨大な像の夢を見た。

*像は世界の王国の変遷を示している。

*最後に、1つの石が人手によらずに切り出され、像を打ち砕いた。

*その石は、大きな山となって全地に満ちた。

*その石は、世界の王国を滅ぼす神の国（メシア的王国）である。

*神の国は永遠に立ち続ける。

ルカの福音書 89回

カエサルへの納税に関する質問 ―クリスチャンが税金を納める理由―

20：19～26

1. はじめに

(1) エルサレムでの奉仕が始まった（19：28～21：38）。

- ①勝利の入城（19：28～44）
- ②諸々の教え（19：45～21：4）
- ③神殿崩壊の予告（21：5～36）
- ④まとめ（21：37～38）

(2) 諸々の教え（19：45～21：4）

- ①宮きよめ（19：45～46）
- ②イエスの教えの要約（19：47～48）
- ③権威に関する論争（20：1～8）
- ④ぶどう園の農夫のたとえ話（20：9～18）
- ⑤カエサルへの納税に関する質問（20：19～26）
- ⑥復活に関する質問（20：27～40）
- ⑦ダビデの子に関する質問（20：41～44）
- ⑧律法学者の偽善（20：45～47）
- ⑨やもめの献金（21：1～4）

(3) 挑戦の目的は2つある。

- ①群衆を誘導し、イエスに敵対させること
- ②イエスがローマ法に違反しているという口実を見つけること

2. アウトライン

- (1) 質問の背景（19～20節）
- (2) 質問の内容（21～22節）
- (3) イエスの回答（23～25節）
- (4) 回答の結果（26節）

3. 結論

- (1) 2種類の権威
- (2) 神への従順

カエサルへの納税に関する質問について学ぶ。

I. 質問の背景 (19～20 節)

1. 19 節

Luk 20:19 律法学者たちと祭司長たちは、このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいた。それでそのとき、イエスに手をかけて捕らえようとしたが、民を恐れた。

(1) 「このたとえ話」とは、「ぶどう園の農夫のたとえ話」である。

①結論は、20章16節である。

Luk 20:16 主人はやって来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。／これを聞いた人たちは、「そんなことが起こってはなりません」と言った。

②神の国は、今の指導者たちから取り去られ、将来の忠実な世代に与えられる。

③律法学者たちと祭司長たちは、自分のことが言われていることに気づいた。

(2) 彼らは、イエスに対する敵対心を募らせた。

①そこで、イエスに手をかけて捕えようとした。

②しかし、民衆を恐れたので、それができなかった。

2. 20 節

Luk 20:20 さて、機会を狙っていた彼らは、義人を装った回し者を遣わした。イエスのことばじりをとらえて、総督の支配と権威に引き渡すためであった。

(1) 彼らは、イエスを畏にかける機会をうかがっていた。

①義人を装った回し者を遣わした。

②「回し者」とは、動機を隠して義人のように振舞うスパイである。

(2) マタ 22:16 によれば、首謀者はパリサイ人たちである。

①彼らは、弟子たちをヘロデ党の者たちといっしょに、イエスのもとに送った。

(3) パリサイ人の特徴

①政治的には、ローマの支配を認めない。反体制派である。

②カエサルを認めることは、【主】を否定することであると教えていた。

③カエサルに税を納めるのは、ローマの権威を認めることである。

(4) ヘロデ党の者の特徴

①彼らは、政治的グループである。

②彼らは、ヘロデ大王の統治を積極的に支持した人たちである。

- ③彼らは、ヘロデ・アンティパスを初めとするヘロデの家系を支持していた。
- ④彼らは、ヘロデ家の中からユダヤの王になる者が出ることを期待していた。
- ⑤彼らは、ローマの支配を受け入れている現実主義者たちであった。
- ⑥しかし、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督であることを喜んでいない。
- ⑦民衆の暴動が原因で、ローマがより強力な統治体制を取ることを恐れていた。

II. 質問の内容 (21～22 節)

1. 21 節

Luk 20:21 彼らはイエスにこう質問した。「先生。私たちは、あなたがお話しになること、お教えになることが正しく、またあなたが人を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。

(1) 最初の語りかけのことば

- ①彼らは、イエスを信じていなかったが、口では別のことを言っている。
- ②誰かが、ほめことばをもって近づいてくるときは、注意が必要である。

(2) 彼らは、律法に関するイエスの教え受け入れているかのように振舞った。

- ①その上で、律法のある点について説明を求めた。

2. 22 節

Luk 20:22 ところで、私たちがカエサルに税金を納めることは、律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。」

(1) これは、イエスを畏にかけるための質問である。

- ①カエサルに税金を納めるべきか否かを問うている。

(2) 「イエス」と答えれば、どうなるか。

- ①パリサイ人たちの教えとは反対の答えである。
- ②イエスは、民衆の支持を失う。
- ③熱心党の者たちは、強く反発する。

(3) 「ノー」と答えれば、どうなるか。

- ①親ローマのヘロデ党の者たちを怒らせる。
- ②パリサイ人たちに、ポンティオ・ピラトの前でイエスを訴える口実を得る。
- ③ルカ 23 : 2

Luk 23:2 そしてイエスを訴え始めて、こう言った。「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」

Ⅲ. イエスの回答 (23～25 節)

1. 23～24 節

Luk 20:23 イエスは彼らの悪巧みを見抜いて言われた。

Luk 20:24 「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。だれの肖像と銘がありますか。」彼らは、「カエサルのです」と言った。

- (1) イエスは、彼らの悪巧みを見抜いておられた。
 - ①その上で、彼らに視聴覚教育を施された。

- (2) イエスは、納税のためのコインを要求した。
 - ①神殿内では、ローマのコインは使用できない。
 - ②神殿税のために使用する貨幣は、ユダヤの銅貨である。
 - ③両替商は、高い手数料を取っていた。大祭司のファミリービジネスであった。
 - ④イエスが宮清めの際に倒したのは、両替人の台である（ヨハ2：15）。

- (3) ローマに税を納めるための貨幣は、デナリ銀貨である。
 - ①そこには、神格化されたカエサルの肖像と銘が刻まれていた。
 - *おそらく皇帝ティベリウス（14～37年）であろう。
 - *「Tiberius Caesar Augustus, son of the Divine Augustus」
 - ②これは、ユダヤ人を支配しているのがローマであることを示していた。
 - ③また、ユダヤ人はローマの徴税制の下にいることを示していた。

- (4) 彼らは、「カエサルのです」と言わざるを得なかった。
 - ①彼らは、日々、ローマの支配下にあることを痛感していた。

2. 25 節

Luk 20:25 すると、イエスは彼らに言われた。「では、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」

- (1) 「カエサルのものはカエサルに」
 - ①ローマから行政サービスを受けているので、徴税は合法的なことである。
 - ②彼らは、ローマの統治による恩恵を被っていた。
 - ③ローマのコインを用いている、道路を使用している、平和を享受している。
 - ④彼らには、ローマに税を支払う十分な理由があった。

- (2) 「神のものは神に返しなさい」

- ①すべての人は、その身に「神のかたち」を帯びている。
- ②すべての人は、神の支配の下にある。
- ③それゆえ、神に返すべきものを返す必要がある。

IV. 回答の結果 (26 節)

1. 26 節

Luk 20:26 彼らは、民の前でイエスのことばじりをとらえることができず、答えに驚嘆して黙ってしまった。

- (1) イエスのことばは、今では広く知られている。
 - ①初めてこれを聞いた人たちは、驚嘆した。
 - ②論理的にも、律法解釈においても、矛盾はなかった。
- (2) 彼らは、正しい判断を下した。
 - ①彼らは、黙ってしまった。

結論

1. 2 種類の権威

(1) 旧約聖書には、2 種類の権威が啓示されている。

- ①神の権威
- ②神から権限が委譲された地上の権威

(2) 神はご自身の主権によって、地上の支配者を立てる。

①ダニ 4 : 17

Dan 4:17 この宣言は見張りの者たちの決定によるもの、／この要請は聖なる者たちのことばによるもの。／これは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最も低い者をその上に立てることを、いのちある者たちが知るためである。』

- ②それゆえ、人間は地上の支配者に従う必要がある。
- ③イエスは、政教分離を教えたのではない。
- ④地上の権威に従うことは、神に従うことの中に含まれる。
- ⑤この観点に立てば、ローマの支配を拒否するパリサイ人の立場は誤りである。
- ⑥1 ペテ 2 : 17

1Pe 2:17 すべての人を敬い、兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を敬いなさい。

(3) ただし、神の権威と地上の権威が対立する場合は、神の権威に従う。

①使 5 : 29

Act 5:29 しかし、ペテロと使徒たちは答えた。「人に従うより、神に従うべきです。」

2. 神への従順

(1) パリサイ人たちは、ローマの支配に抵抗しつつも、税は納めていた。

(2) しかし、神の権威には従っていなかった。

①神から受けている多くの祝福を忘れていた。

②神に対する義務を忘れていた。

③何よりも、神の「像」そのものであるイエスを信じなかった。

④へブ1:3

Heb 1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。

(3) すべての人は、神の摂理の中で生かされている。

①その神に、返すべきものを返さないのは、罪である。

ルカの福音書 90回
復活に関する質問 ー子羊の吟味の終了ー
20：27～40

1. 文脈の確認

(1) エルサレムでの奉仕が始まった（19：28～21：38）。

- ①勝利の入城（19：28～44）
- ②諸々の教え（19：45～21：4）
- ③神殿崩壊の予告（21：5～36）
- ④まとめ（21：37～38）

(2) 諸々の教え（19：45～21：4）

- ①宮きよめ（19：45～46）
- ②イエスの教えの要約（19：47～48）
- ③権威に関する論争（20：1～8）
- ④ぶどう園の農夫のたとえ話（20：9～18）
- ⑤カエサルへの納税に関する質問（20：19～26）
- ⑥復活に関する質問（20：27～40）
- ⑦ダビデの子に関する質問（20：41～44）
- ⑧律法学者の偽善（20：45～47）
- ⑨やもめの献金（21：1～4）

(3) 注目点

- ①ルカの読者（異邦人）にとって、復活は関心のあるテーマである。
- ②ギリシア哲学は、肉体の復活を否定した。
 - * 霊魂は、不滅である。
 - * 霊魂は善であり、肉体は悪である。
 - * 霊魂は、肉体の中に閉じ込められているが、死によって解放される。
- ③この箇所は、神殿での論争のクライマックスになっている。
 - * 小羊イエスの吟味が終わったということである。

2. アウトライン

- (1) サドカイ人たちの質問（27～33節）
- (2) イエスの回答（34～38節）
- (3) 論敵たちの沈黙（39～40節）

3. 結論：復活の教理

- (1) 旧約聖書
- (2) アブラハム契約

復活はあるのかについて考える。

I. サドカイ人たちの質問 (27～33 節)

1. 27 節

Luk 20:27 復活があることを否定しているサドカイ人たちが何人か、イエスのところに来て質問した。

(1) ルカは、イエスの論敵が誰であることを明示してこなかった。

- ① マタイとマルコは、パリサイ人とヘロデ党の者たちを挙げている。
- ② ルカの読者には、それは不要な情報である。
- ③ しかし、この箇所ではサドカイ人の名が書かれている。
- ④ テーマが死者の復活なので、サドカイ人の名を紹介する必要があった。

(2) 大祭司や祭司長は、サドカイ人である。

- ① 紀元1世紀のユダヤ社会で、大きな権力を持っていた。
 - * 紀元70年の神殿崩壊により、サドカイ派は消滅する。
- ② 彼らは、サンヘドリンの議席（70席＋議長）の過半数を占めていた。
 - * しかし、少数派のパリサイ人たちの意見を無視することができなかった。
 - * 民衆は、パリサイ人たちを支持していた。
- ③ 彼らは、宗教よりも政治に関心を抱いていた。
 - * 彼らは、ローマの支配を受け入れていた。
 - * 彼らは、イエスの活動にさほどの関心を示さなかった。
 - * ローマが介入してくる危険性を感じたために、イエスに関心を示した。

(3) 神学的にパリサイ人と異なる点がいくつかあった。

- ① 口伝律法を認めず、書かれたものだけを権威ある教えとする。
- ② 教理を導き出すためには、モーセの五書だけを利用する。
 - * それ以外の書は、教訓を学ぶためのものである。
- ③ 神は日常生活には介入しない。
 - * 自己満足とうぬぼれが特徴である。
- ④ 死後のいのちも、死者の復活も、認めない。
 - * 肉体の死とともに靈魂も滅びる。

*死後の裁きや褒賞はない。

⑤天使や悪霊の存在を否定する。

(4) 彼らは、復活に関する質問をイエスに投げかけた。

①サドカイ人たちは、この質問によって、パリサイ人たちを悩ませていた。

②サドカイ人たちは、同じ質問によって、イエスを困らせようとした。

2. 28～33節

Luk 20:28 「先生、モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が妻を迎えて死に、子がいなかった場合、その弟が兄嫁を妻にして、兄のために子孫を起こさなければならぬ。』

Luk 20:29 ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎え、子がいないままで死にました。

Luk 20:30 次男も、

Luk 20:31 三男もその兄嫁を妻とし、七人とも同じように、子を残さずに死にました。

Luk 20:32 最後に、その妻も死にました。

Luk 20:33 では復活の際、彼女は彼らのうちのだれの妻になるのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが。」

(1) この質問の背景（申 25：5～6）

Deu 25:5 兄弟と一緒に住んでいて、そのうちの一人が死に、彼に息子がいない場合、死んだ者の妻は家族以外のほかの男に嫁いではならない。その夫の兄弟がその女のところに入り、これを妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。

Deu 25:6 そして彼女が産む最初の男子が、死んだ兄弟の名を継ぎ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない。

①これは、レビラート婚の規定である。

②これは、寡婦の経済的地位と社会的地位を守るためのものである。

(2) 彼らの質問は、極端な状況を想定したものである。

①ある女が7人の兄弟たちと結婚した。

②彼ら全員が、子を残すことなく死んだ。

③それゆえ、この女の自分を自分の妻だと主張できる男がいなかった。

④では、復活の際、その女は誰の妻になるのか。

⑤サドカイ人たちは、得意げにこの質問をしたのである。

II. イエスの回答（34～38節）

1. 34～36節

Luk 20:34 イエスは彼らに言われた。「この世の子らは、めとったり嫁いだりするが、

Luk 20:35 次の世に入るのにふさわしく、死んだ者の中から復活するのにふさわしいと認められた人たちは、めとることも嫁ぐこともありません。

Luk 20:36 彼らが死ぬことは、もうあり得ないからです。彼らは御使いのようであり、復活の子として神の子なのです。

(1) マタ 22 : 29

Mat 22:29 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは聖書も神の力も知らないので、思い違いをしています。

(2) イエスは、今の時代と御国の時代を対比させた。

- ①復活のからだは、地上のからだの延長線上にあるのではない。
- ②それは、質的に新しくされたからだである。
- ③それは、永遠に存続するからだである。
- ④復活したからだは、天にいる天使のようである。

(3) 復活のからだは不滅なので、結婚する必要がなくなる。

- ①夫婦がお互いの顔を認識できないということではない。
- ②両者の関係は、まったく新しいものとなる。

(4) 「死んだ者の中から復活するのにふさわしいと認められた人たち」

- ①ここでは、信者の復活がテーマとなっている。
- ②信仰によって義とされた人たちが、復活に与るのである。

(5) 「復活の子として神の子なのです」

- ①信者はすでに神の子である。
- ②復活のからだは、信者が神の子であることの実質的な表れである。
- ③御国においては、復活した人たちと、地上の肉体を持った人たちがいる。
 - * 「復活の子」とは、復活した人たちである。
- ④ギリシア人たちは、立派な人たちが神になると考えていた。
- ⑤イエスは、信者は神の子であり、復活によってそれが証明されると教えた。

2. 37～38節

Luk 20:37 モーセも柴の箇所、主を『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、死んだ者がよみがえることを明らかにしました。

Luk 20:38 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。神にとっては、すべての者が生きているのです。」

(1) 出3:6~7

Exo 3:6 さらに仰せられた。「わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは顔を隠した。神を仰ぎ見るのを恐れたからである。

Exo 3:7 【主】は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見、追い立てる者たちの前での彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを確かに知っている。

(2) イエスは、トーラー（モーセの五書）から引用された。

- ①サドカイ人たちは、教理を導き出す書として、トーラーだけを認めていた。
- ②彼らは、トーラーには復活の教えがないと信じていた。

(3) イエスは、トーラーの中に復活の証明があることを示した。

- ①神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。
- ②神がモーセに語りかけた時には、アブラハム、イサク、ヤコブは死んでいた。
- ③しかし、神は生きている者の神である。
- ④つまり、アブラハム、イサク、ヤコブは生きているということである。
- ⑤そして彼らは、将来復活する。
- ⑥もしそうでなければ、「わたしは、〇〇の神であった」という表現になる。

Ⅲ. 論敵たちの沈黙 (39~40 節)

1. 39~40 節

Luk 20:39 律法学者たちの何人かが、「先生、立派なお答えです」と答えた。

Luk 20:40 彼らはそれ以上、何もあえて質問しようとはしなかった。

(1) 律法学者たち（パリサイ人たち）は、感動した。

- ①彼らは、復活に関して、サドカイ人たちを論破する方法を得た。

(2) 彼らとは、パリサイ人、ヘロデ党の者たち、サドカイ人である。

- ①パリサイ人たちは、イエスの権威がどこからきたかを問うた。
- ②ヘロデ党の者たちは、カイサルに税を納めることの是非を問うた。
- ③サドカイ人たちは、復活の可能性について問うた。

結論：復活の教理

1. 旧約聖書

(1) ヨブ 19:25~26

Job 19:25 私は知っている。／私を贖う方は生きておられ、／ついには、土のちりの上に立たれることを。

Job 19:26 私の皮がこのように剥ぎ取られた後に、／私は私の肉から神を見る。

①ヨブは、復活の希望を告白している。

(2) イザ 26 : 19

Isa 26:19 あなたの死人は生き返り、／私の屍は、よみがえります。／覚めよ、喜び歌え。土のちりの中にとどまる者よ。／まことに、あなたの露は光の露。／地は死者の霊を生き返らせます。

①メシアの再臨の時に起こる旧約時代の聖徒の復活

(3) ダニ 12 : 2

Dan 12:2 ちりの大地の中に眠っている者のうち、／多くの者が目を覚ます。／ある者は永遠のいのちに、／ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。

①信者の復活（第一の復活）

②不信者の復活（第二の復活）

2. アブラハム契約

(1) 創 17 : 8

Gen 17:8 わたしは、あなたの寄留の地、カナンを、あなたとあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。」

①カナンの地は、アブラハムとその子孫に与えられた。

②神はこの約束をアブラハム、イサク、ヤコブに個人的に与えた。

③しかし彼らは、その土地を手に入れることなくして死んでいった。

④神がこの約束を果たすためには、彼らを復活させなければならない。

⑤アブラハムがイサクを犠牲にする決心をしたのは、復活を信じたからである。

(2) 置換神学の問題点

①イスラエルは見捨てられ、教会が新しいイスラエルとなった。

②イスラエルに与えられていた約束は、教会が引き継いだ。

③もしそうなら、神の約束は果たされないままで終わることになる。

④族長たちに与えられた土地の約束が成就するのは、御国においてである。

(3) マタ 8 : 11

Mat 8:11 あなたがたに言いますが、多くの人々が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。

①これは、御国の祝福を描写したものである。

②アブラハム、イサク、ヤコブは復活して、そこにいる。